

三窓式釣手土器の出現をめぐって —神像筒形土器との関係について—

三橋友暉・井関文明

1. はじめに

神奈川県寒川町にある典型的な縄文時代中期の大集落として知られる岡田遺跡では勝坂式期と加曽利E式期前半・後半の三つの時期の環状集落が形成され、住居跡324軒が発掘調査により検出されている（鈴木1996：第1図）。遺物では当該期を中心とする多量の土器や石器が出土している（註1）。釣手土器は5点発見され、一つの遺跡からの出土数としては県内最多であり、このあたり方は全国的に数例しかないとされている（註2）。また近年では、岡田遺跡出土土器のうち、116号住居跡・212号住居跡・6号住居跡から出土した釣手土器を対象にした儀礼・象徴行為に関係する検討が行われている（中村2010・2013）。

筆者らは寒川町の考古資料を代表する遺物（平成24年3月21日に町指定重要文化財第20号）に岡田遺跡116号住居址出土の釣手土器があることを知り（註1）、この釣手土器が果たした文化的、社会的な役割について関心を抱いた。

こうした経緯を元に、本稿では岡田遺跡の116号住居址から出土したこの種の釣手土器について、どのような背景で出現したのかといった成り立ちについての検討を行ってみたい（第2図）。

2. 釣手土器とは

釣手土器は「本体としての浅鉢に」あるいは「鉢の上に覆いをかけたような」、「釣手を掛け渡したもので」、「灯火具と考えられる」といわれている（藤森1966、新津1999、中村2008・2019a）。今日では中村耕作氏によつて釣手部の形態が「第I種（把手式）・第II種（二窓式）・第III種（三窓式・天蓋式）・第IV種（四窓式）」に区分されていることが示されている（中村2008）。

管見に及んだ限りであるが、中村氏が釣手土器を最もよく研究されていることから、以下では氏の研究をひもとく形で当該土器を論じることにする。

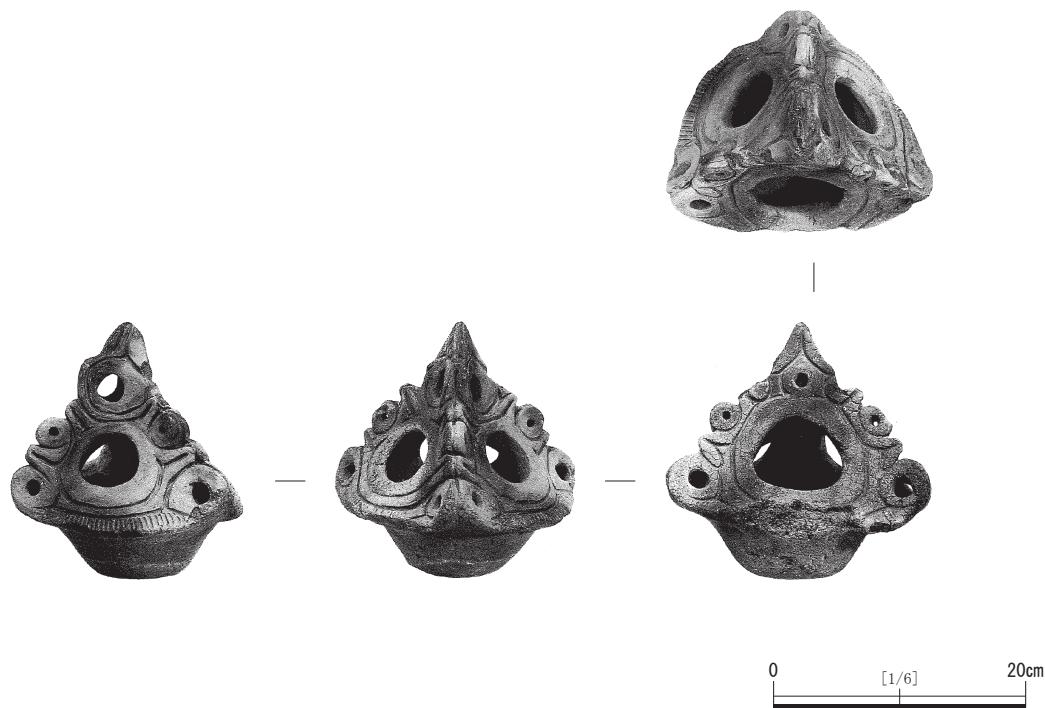
釣手土器の初源は、中期中葉の藤内式（勝坂2式）期であると考えられている（第3図）。一方、終焉は後期後葉以降であると考えられている（中村2008）。その中で形態と分布を異にする中期中葉～後期後葉の3時間間の釣手土器の系統関係は明らかではないと言われている。また、中期中葉～後期前葉ではIII期に区分されている（中村2013・2019a）。そのIII期区分において釣手土器は、三窓式（I期：中期中葉～後葉）→二窓式（II期：中期後葉）→把手式（III期：中期後葉～後期前葉）の変遷過程を迎えると考えられている（中村2013・2019a）。

このような中で、如何にして釣手土器が誕生し、かつそれがどのように展開したかのメカニズム（仕組み）については、中村氏によって次のように推測されている。

「土偶装飾付土器」における「人体文」（頭部から脚部までの全身像）が付される段階から「脚部、胴部、腕部の順でだんだんと土器器体に融合されて、最終的に、頭部+土器器体という顔面把手付土器」が成立する段階を経て、更にその土器の顔面部分を打ち欠いた土器が出現する。これが釣手土器誕生のモデルになる。



第1図 岡田遺跡の位置[1/25,000]（国土地理院地形図「藤沢・伊勢原」2016年7月13日・包蔵地範囲は2016年8月2日現在）



第2図 岡田遺跡116号住居址出土釣手土器（県営岡田団地内遺跡発掘調査団1993）[1/6]

言い換えると、初現における釣手土器にみられる「窓」や「玉抱き三叉文」（背面に大きなリングを持つ）等の特徴は「顔面把手付土器」の「顔面部分をそっくり割り貫いた例や眉間に穿孔した例」のあり方から誕生したものであると想定される。

その後、三窓式から二窓式への展開は背面にある「玉抱き三叉文」の「玉」の部分が「大きなリング」に見立てられ、それを抱く「三叉文」の部分を構成する「左右の三角窓」が「視認しがたい」三窓式、すなわち「リングの中の円が背面の主窓のようになって」、「二窓式を想起させる」三窓式の出現が鍵となる。

三窓式段階の釣手土器は「左右の三角窓」のある側を「背面」、それ以外を「表面」（正面）と二面に認識可能となっていることが注目される。すなわち、二窓式は上記のような段階を経て成立することが前提となっている。このような中で二窓式は次のような特徴を持って確認される。

二窓式は「玉抱き三叉文という象徴的文様に由来する」（中村2019a）と考えられている。しかし、二窓式に「玉抱き三叉文」は見出せない。三窓式に見出された「玉抱き三叉文」に対応する二窓式の部分は「三角窓」のように見える部分である。この部分は、三窓式から二窓式へと釣手土器が変化することを前提にした場合、二つの「三叉文」が「玉」（リング）と融合して三角形を構成する二つの角をもつように見えることから「背面の窓を三角形」にさせた部分と考えられる（中村2019a：第4図）。

とはいって、これだけでは釣手土器が三窓式から二窓式に変わる外見上の構造的な変化を説明することにはならない。形態の変化がイメージできないからである。そこで、釣手土器における三窓式と二窓式の成形技法から推察された基本構造の変化に着目する必要がある。中村氏によれば、三窓式は「左右の粘土紐を掛け渡し、さらに背面に一本の粘土紐を渡すもの」から「背面の粘土紐」を除去すれば、二窓式の基本構造へと変化する。この変化は三窓式と二窓式の比較によって抽出されるが、三窓式と二窓式の最大の違いが正面（表面）と背面の違いにあり、三窓式が非対称であるのに対し、二窓式が対称になっていること、あるいは三窓式が正面と背面を区別しやすいのに対し、二窓式が区別しにくいということから導き出される。

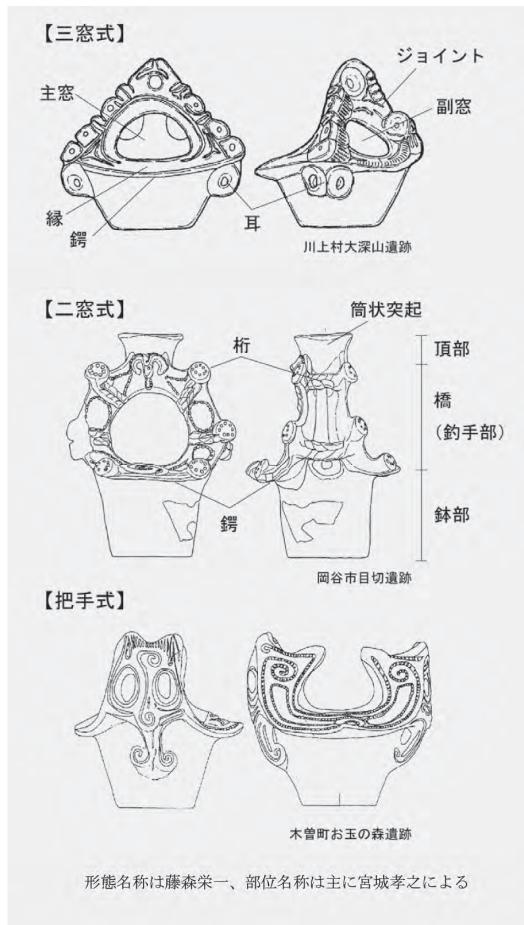
ただし、背面の装飾が簡略化しないことと、主窓（前窓）に対する副窓（後窓）の主と副の関係性は三窓式から二窓式に変化しても維持される。

成形技法の変化に着目することによって三窓式から二窓式への構造的な変化は中村氏によって次のように説明される。三窓式においては芯を必要としない粘土紐を掛け渡した第一段階があり、その段階から粘土紐を芯として粘土板を貼り合わせる第二段階に移行する。三窓式の第二段階で登場する粘土板を張り合わせる成形技法が芯を必要とせず前後に粘土板を接合させることでそれを芯の代用とする段階で二窓式が成立するというものである。ここまでが三窓式から二窓式への変化のメカニズムについてである。

次に、二窓式から把手式への変化のメカニズムについてはどう説明されるのだろうか。把手式は二窓式の頂部を打ち欠いた（消失した）土器がモデルになる。二窓式から把手式に変わる外見上の構造的な変化は土器を構成する「窓」が消失することである。とはいって、把手式も釣手土器の範疇に収まるのは耳・柄等が配される部分に紐を通して釣る穴（孔）が想定されるからである。

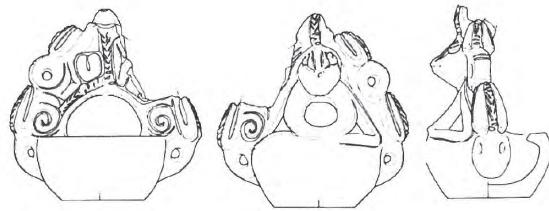
この耳・柄等が配される部分に着目すると、二窓式から把手式へと構造的に変化することを可能とした成形法が見いだされる。

要するに二窓式から把手式への変化は耳・柄等を配する部分が前後の粘土板を接合させることによって形成される突起だけで成立することによる。この把手式の属性から二窓式へとさかのぼる過程で逆に当該土器が「釣手」という釣るために製作された形態構造的な側面が見いだされることとなった。



第3図 釣手土器の形態・部位名称 (中村2019c)

第4図 東京都井草八幡宮所蔵釣手土器 (中村2019a)



第1表 岡田遺跡出土釣手土器					
No.	遺構名	種	時期	型式	備考(石器と土器の共伴関係)
1	116号住居址	III (I)	井戸尻		
2	212号住居址	II	II	他	
3	6号住居址(床面)	II	(IIIa)	武藏台東型	
4	8・9号住居址(寒川町観光協会)か土坑(中村2019)か	II ?	(加曾利E2式)(寒川町観光協会)II		「釣手付け根部の破片」(中村2019)か
5	1号土壙址(寒川町観光協会)	III(中村2019)	勝坂(寒川町観光協会)式		「頂部装飾の一部思われる球状破片や、左右の装飾の一部と思われる破片などが未接合の状態」(中村2019) 「接合されたものの1点は主窓右側と考えられるが、もう1点は左側ではなく、背面の橋と考えられる」(中村2019)

種	I	把手式
	II	二窓式
	III	三窓式(天蓋式)
	IV	四窓式
時期	I	藤内式期～曾利I式期
	II	曾利II式期(唐草文様、2期、加曾利E1期～2b期、：黒尾1995・2004、中富・神明式2期：繩繩・高橋2008、古串田新式)
	III	曾利III式併行以降
		IIIa=曾利III式期(加曾利E2c期～3b1期、中富・神明式3期)
		IIIb=曾利IV式期以降に細分
型式	<武藏台東型>	半截竹管状工具の連続刺突による施文が特徴。 頂部に円状を、主窓を囲んで放射状文を描くが、ブリッジを刺突文で充填する。多くが円文または渦巻文を主文様とし、耳を持つ形状である。

しかし、ここまで説明では釣手土器が「釣る」行為を目的とした以外で何を目的として釣り下げられていたのかという用途の推定には至っていない。そこで、当該土器がこれまでに灯火具として用途推定されてきた研究に着目する必要がある。

これまで釣手土器は灯火具（ランプ説）であったと用途推定されてきた。その理由は、肉眼観察によって土器に「燈（灯）心の焼け跡」（「燃えた痕跡」）とその「内部に黒々と煤が付着した」部分が認められた（藤森1964・1965）ことに端を発する。

これに対して、「スス」痕跡の認定方法に問題があると指摘された（宮城1982）が、「鉢部の底（見込み部）には煤はみられ」ないことから、「内部での燃焼を考えざるを得ない」とされ、灯火具説が別視点の肯定の根拠にされてきた（新津1999）。

ところが、近年では釣手土器が灯火具とは異なる用い方をされたのではないかという見解が示されている。それは、土器の底部内面に残るコゲ（従来のスス）の付着が「喫水線が底面近くに下がるまで搔い出されたか、汁気がなくなり煮詰まるまで火にかけられていたかのいずれかを示す」ことから、「煮沸という調理行為」が想定され（堤2019a）、煮沸具と考えざるを得ない観察結果が得られたからである。

なお、釣手土器に安定同位体分析及び脂質（残留有機物）分析という理化学的分析を行った結果、土器内面に残存していた付着物の炭素同位体比と総脂質（残留有機物）の成分が深鉢形土器とは異なり「脂質に富んだ材料を内容物」（宮内2019）としていたことが明らかにされたが、それによって釣手土器が灯火具か、煮沸具かを断定するまでには到らなかった。

一方、釣手土器にはスス（コゲ）が確認できないものが少なくなく、火災住居からの出土もあって、その際のススなのか、土器使用時のススなのかを明確に判別することが不可能で用途推定には困難をともなうといわれている（中村2008）。

3. 岡田遺跡における釣手土器

前項で述べたように釣手土器そのものから用途推定することは困難であるため出土位置を検証することから使用のあり方を探りたい。

岡田遺跡ではすでに釣手土器が5点（個体）知られている（第1表）。このうちで全体形が復元されている釣手土器は三窓式（No.1）と二窓式（No.3）の釣手土器各1点である。しかし、報告書で掲載されている釣手土器は1点（No.1）のみである。

第1表におけるNo.1～3の項目は中村耕作氏の分類を参考とした（中村2013）。No.4は「住居址」出土か「土坑」出土かで見解が分かれる。No.4の「種」（II?）については筆者らが判断した。No.5は遺構名で「土壙」と「土坑」の捉え方に違いはあるものの、中村氏の記載（中村2019）に基づいて「種」（III）と判断した。No.1は中期中葉の勝坂3式（井戸尻式）に比定されると考えられる。以上、釣手土器の全体像がわかり、かつ報告書でも確認できる資料は116号住居址出土土器1点（No.1）のみであった。従ってこれを詳しく掘り下げる。

この釣手土器の成形技法から推察された基本構造については、既に浅川利一氏によって形態的な特徴から捉えられている（浅川1991）。その内容を本論でこれまで記述した形態の着眼点から、読み解くこととした。

浅川氏の観察によって得られた情報から当該土器を以下のように再構成すると「三方に円形の窓」があり、正面（表面）観では三角錐形を呈し、この三角錐形を構成する稜が側面観ではやや内側に反り、上面観では、

背面（裏面）を構成する稜が突きでいる。このように記載されるが、これが外見上の大凡の形態的特徴になる。ちなみに、この土器の法量は高さ「18cm」（「寒川町」では「21.7cm」）で、「長辺幅21cm」（浅川1991）を測るという。このような形態は粘土紐を芯として粘土板を貼り合わせる成形技法によるものと考えられるが、中央に穴を開けて周囲に文様をつけた三角錐状を成す三面の粘土板を、「底部を構成する浅鉢の台上」へ一挙に「寄せかけて貼り合わせ」、貼り合わせた部分に粘土を「補強しながら紐孔をまとめ、沈線文を施して仕上げた」過程で得られるということになる。この土器の文様構成は、ここで記述された「沈線文」以外にこれまで記述した「玉抱三叉文」がある。浅川氏以外でこの土器を観察した中村氏によれば、頭頂部は「蛇体装飾」の頭部が配され、表面上部が「三叉文」、下部が「円文」、背面が「眼鏡状突起」をモチーフとして構成される。また、三角錐状を成す三面の接合部に「円文」、その間を「沈線による連続三叉文」が施されるという大きく2つの特徴が文様構成を中心に説明される（中村2013）。これに中村氏の観察視点を援用して三角錐形を構成する稜の文様構成の特徴を加えると、正面の頭髪部は波打っているか、もしくは「上下にうねる」沈線によって区画された蛇の体部が見いだされることになる。他に浅川氏が言う「浅鉢の台上」と三面の粘土板を張り合わせた部分にも施される文様がある。この文様の「刻み」か「沈線」かは報告書の写真からだけでは判別が困難だが、どちらかに関係する文様であることが認められる。

以上、ここまでで岡田遺跡を代表する土器（No.1）の形態的なあり方を先行する研究の中で再確認した。では、この岡田遺跡の釣手土器（No.1）はどのような背景で前述した形となって現れることになったのだろうか？

以下では、その背景について探ることになる。

4. 三窓式釣手土器出現の背景

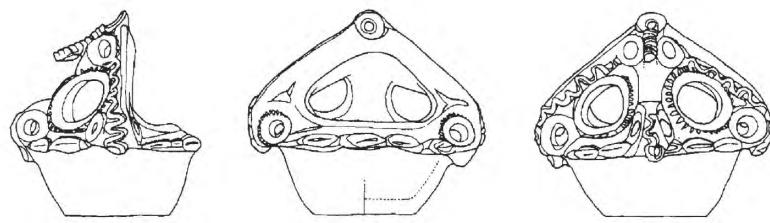
この岡田遺跡の釣手土器は中村氏によれば、編年的に藤内式・井戸尻式期に位置づけられる（中村2009）。この段階における釣手土器は、岡田遺跡の釣手土器以外に神奈川県伊勢原市御伊勢森遺跡（御伊勢森中世遺跡発掘調査委員会1979）、長野県川上村大深山遺跡（長野県南佐久郡誌編纂委員会1998）・富士見町曾利遺跡（諏訪市博物館1999）などがある（第5図）。

大深山遺跡の釣手土器は「円文の背面に縄文が施される」という特異性を有しているが、それ以外の文様構成は岡田遺跡の釣手土器と共通する。御伊勢森遺跡の釣手土器は「表面頭頂部に円文」が施されるが、「円文の上に三叉文が施されず背面の窓を構成する隆帯に刻みが施される点」を除き岡田遺跡の釣手土器と文様構成が共通する。その他に「頭頂部に円文」・「眼鏡状突起」・「蛇体装飾」といった文様構成が共通する同時期の釣手土器の出土例として山梨県石之坪遺跡（韮崎市教育委員会編2001）等がある（中村2009）。

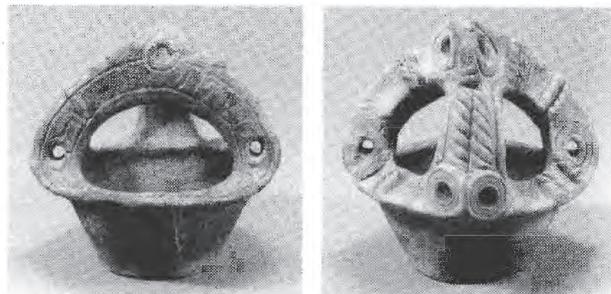
ところで、これらの釣手土器に類似する文様構成（頭頂部円文・眼鏡状突起・蛇体装飾）のある同時期の顔面把手（付土器）が出土した神奈川県比々多神社境内遺跡（中村2013）・原口遺跡（財団法人かながわ考古学財団2002）、長野県藤内遺跡（富士見町教育委員会編2011）等の遺跡は当該釣手土器が分布する神奈川県西部と八ヶ岳山麓といった範囲も共通する関係にあることが中村氏に指摘されている（中村2009・2013）。岡田遺跡の釣手土器における背面は、浅川氏によれば「両目を見開いて鼻を突き出した奇怪な獸面」と捉えられている。岡田遺跡の釣手土器に限らず大深山遺跡と御伊勢森遺跡の釣手土器における背面も同様に「両目を見開いて鼻を突き出した奇怪な獸面」と捉えられることが可能と思われる。

これとは別に、これらの三窓式の釣手土器における正面は、中村氏の考え方を援用すると「顔面把手付土

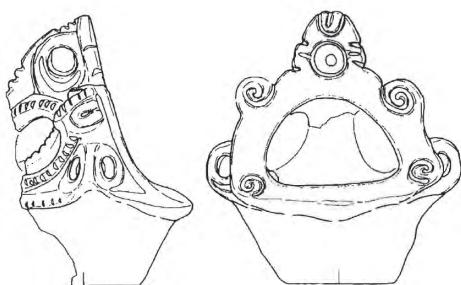
三窓式釣手土器の出現をめぐって



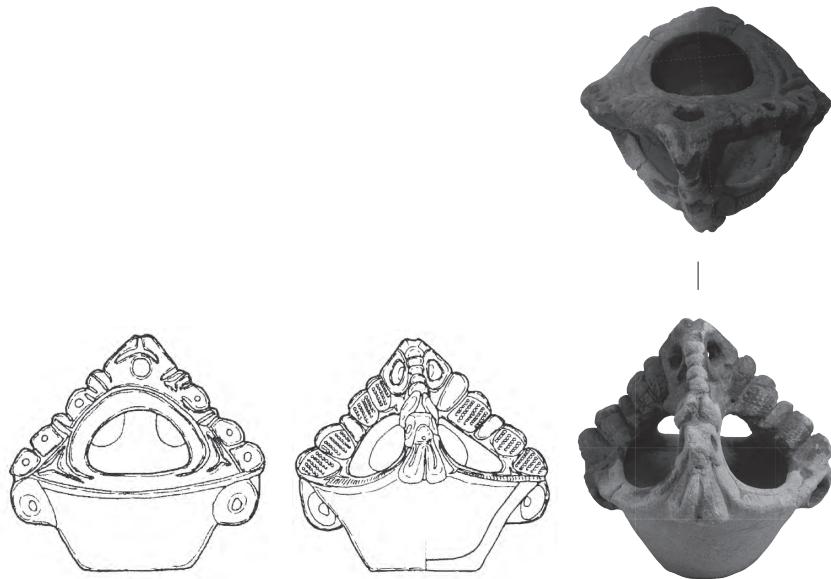
1 神奈川県伊勢原市御伊勢森



2 長野県富士見町曾利 (縮尺不同)



3 山梨県韮崎市石之坪西地区



4 長野県川上村大深山

0 [1/6] 20cm

第5図 岡田遺跡出土釣手土器と類似する装飾を持つ釣手土器 (中村2009を一部改変・4の写真是堤2019bから抜粋) [1/6]

器」の「顔面部分をそっくり削り貫いた」あるいは「顔面を打ち欠いた」行為を「造形の中に取り込んだもの」として成立すると解釈されることになる。とはいっても、ここで注目すべきことは釣手土器と顔面把手（付土器）の出現が「ほぼ同時期」であるとの中村氏の指摘である（中村2019b）。中村氏は「土器から切り離された顔面把手（頭部像）のさらに顔面を打ち欠いた形態が釣手土器のモデルである。」（2019a）とする一方、釣手土器は「顔面部を打ち欠かれた」、「行為を先取りした造形と位置付けることが可能なのである」（中村2019b）と述べている。このことは釣手土器製作行為と顔面把手の顔面部の打ち欠き行為（それを指摘した資料はほとんどが井戸尻式期（勝坂3式期））はそれ以前に遡る時期に起源を見出さなければならないことを意味していると思われる。

藤内式期の土器には三窓式の釣手土器以外で深鉢形土器と浅鉢形土器があり、当該期以前から系統関係が追える釣手土器や有孔鍔付土器（阿部2019）の存在は確認されていない。文様構成の中で三窓式の釣手土器に關係するものには、円文（円形文）、渦巻文、連続爪形文、交互刺突文、刻み目文、集合沈線文、三叉文、三角形文等がみられる。他に眼鏡状突起や蛇体装飾があげられる。しかし、これらの文様や装飾には三窓式釣手土器の正面窓の製作や顔面把手の顔面部の打ち欠き行為の起源とみなしえることが困難である。これらの土器製作や打ち欠き行為の起源を前の時期に求めるにすれば、他に注目すべき文様や装飾を探さなければならないだろう。

5. 神像筒形土器との関係について

藤内式期の「神像筒形土器」に注目したい（第6図）。注目すべき点は、非対称的かもしくは内外面の双方向からみられる人体文である。人体文の顔面（頭部）は、「双環もしくは双眼だけ」（富士見町井戸尻考古館2006）の「『人面』とはかけ離れた奇怪な雰囲気を醸し出している」、「非対称な環状渦巻突起」（小杉2007）とされる。人とかけ離れた顔もしくは眼が、「神」の名が冠せられた所以だが、「双環」は「非対称」の大きな「円孔」と「雲形の孔」の異なる二つの顔が想定される一方、「双孔の眼」は左眼が大きな「円孔」で、右眼が「雲形の孔」とされ、更に左眼には「螺旋状の環形」が「貫通している」ことも指摘されている（長野県富士見市教育委員会2011）。左右の眼は内外面からみられる眼であるものの、左眼に貫通している螺旋状の環形とされる装飾が外面の円孔のみであることから、内外面で左眼の外観が異なる。従って人体文の顔面（頭部）は居並ぶ位置もしくは内外面の双方で異なる顔もしくは眼をしているようにみえる。この異なる造形が、釣手土器の円形の窓と獸面の新たな区別を生み出す上で関連している可能性がある。

つまり神像筒形土器の顔面における非対称的かもしくは内外面の違いが、釣手土器の正面と背面の違いの起源になったという考え方である。この考え方は神像筒形土器以外にも「三穴の眼鏡状突起」（財団法人埼玉県埋蔵文化財事業団1985）が付いた、「別の人物か同一人物か」という議論が提起される内外面（表と裏）が異なる「双眼突起」が付いたともいわれる同時期（勝坂2式期）の深鉢形土器（第7図）から明確にうかがうことができるであろう（埼玉県立歴史と民俗の博物館2023）。

というのは、双眼突起の正面が内面及び同方向の外面両方から「見通し重ねること」（小杉2007）で「杏仁形のモチーフを吊り下げ」た人体の顔である一方、外面から捉えられる双眼突起の背面が「カエルのように足を折り曲げた」人体の正面の顔とは別の顔（埼玉県立歴史と民俗の博物館2023）と理解され、「三穴」構造の頭部の造形が、まさしく三窓式釣手土器の三窓構造を彷彿とさせるからに他ならない。この深鉢形土器の頭部となる「三穴の眼鏡状突起」との構造的な類似性は、たとえ三窓式釣手土器がこの時期に出現して



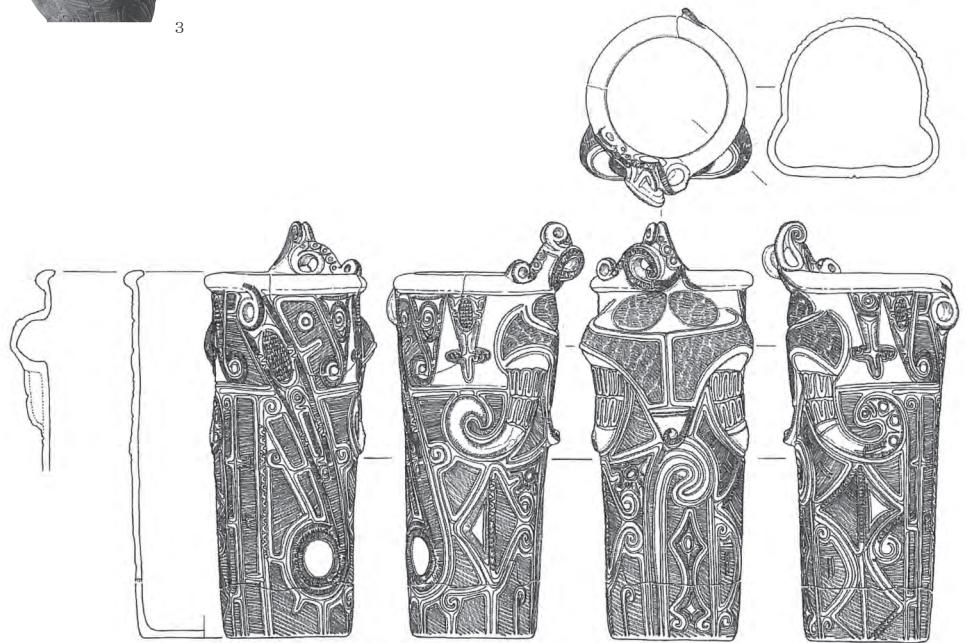
1



2



3

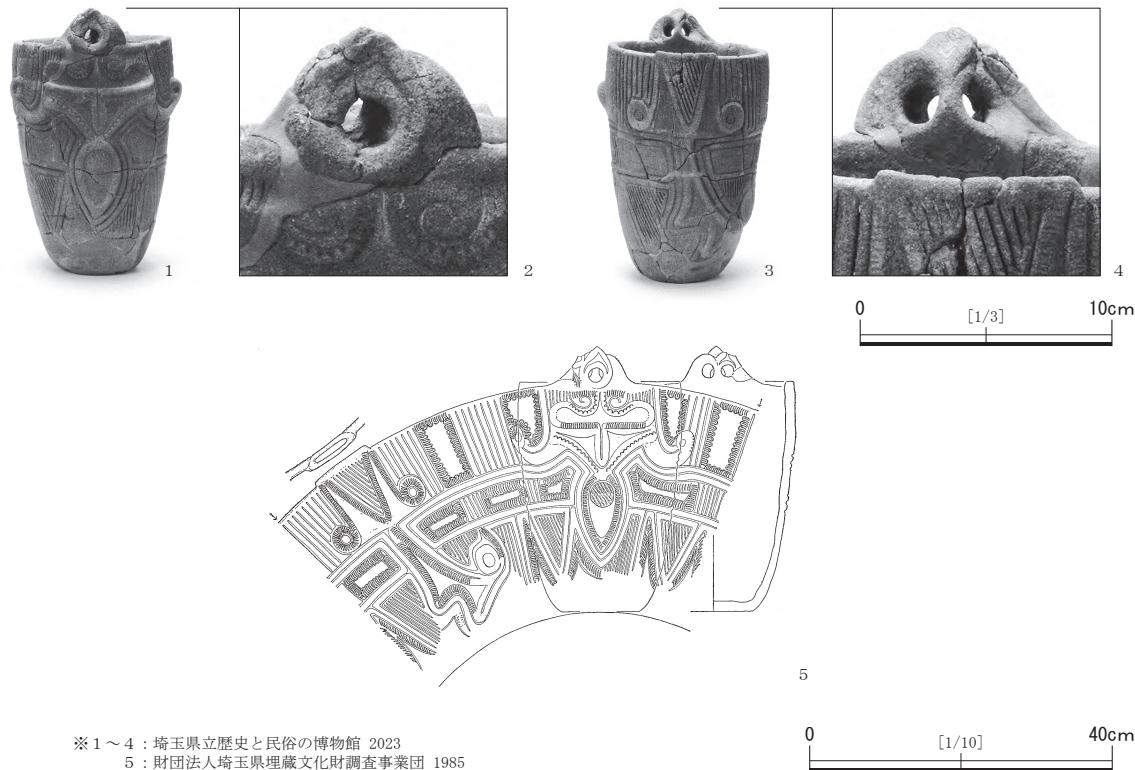


4

※ 1～3：長野県富士見町井戸尻考古館 2006
4：長野県富士見町教育委員会 2011

0 [1/10] 40cm

第6図 長野県篠内遺跡出土土偶装飾付土器（神像筒形土器）[1/10]



※1～4：埼玉県立歴史と民俗の博物館 2023
5：財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985

第7図 埼玉県北塚屋遺跡出土深鉢形土器[1/10]・双眼突起[1/3]

いたとする逆転現象の脈絡で論じられようとも、問題提起されたままで残されることが予測される。

次の時期の釣手土器の表面窓や顔面部の打ち欠きといった新たな造形や行為の起源となるものは、土器の中で突出している円形をモチーフとした異質的な象徴に求められると思われるが、新たな造形や行為の発現を可能にするのは神像筒形土器や双眼突起が付いた深鉢形土器にみられる非対称的もしくは表と裏の関係で同時に成立する異なる顔もしくは眼ではないだろうか。

井戸尻式期の三窓式における正面の窓は単に「窓」であって、その窓は「顔面」の空白部分である。言い換えると井戸尻式期の釣手土器は正面が空白の顔面で、背面が獣面で構成されるが、この区別の起源は、神像筒形土器や双眼突起が付いた深鉢形土器のような、内外面で顔もしくは眼が非対称か表裏面かで区別される土器造形にある可能性を指摘したことで、本稿を終えることとしたい。

6. おわりに

釣手土器は、火の神を胎内に宿した女神をモチーフにしたものであるという説がある。そのような釣手土器の存在や神像筒形土器の存在などから、縄文時代中期には神とよばれるような存在を崇拝し偶像していたと考えられる。また縄文時代中期以前の土偶には顔がないものが多く、中期になると顔が作られるようになるというのも興味深い。縄文時代中期の人々がそれ以前の人々とは明らかに異なる水準で、神のような存在を信仰していたと考えられる。その神のような存在の背後には「人間自身も環境を構成」し、「周囲の自然と一体化した」アニミズム（竹沢2023）の豊かな社会が想定されよう。

今後こうした仮説を検証していくためにも、釣手土器や神像筒形土器などの検討を進めていく必要がある。さらに、祭祀や儀礼の研究も見逃せない。縄文時代人の思想・信仰の解明に少しでも近づくためには、

縄文文化の検討・考察をより一層深めていかねばならない。

謝辞

本稿を草するにあたり、下記の方々から多大なるご配慮を賜った。末筆ではあるが記して感謝の意を表する次第である。

太田光春、小島清一、小林秀満、芹沢一路、堤 隆、長島真弓、中島一成、林田 大、松森多恵（五十音順、敬称略）

【註】

註1 寒川町「岡田遺跡出土遺物（縄文土器）」：<http://www.town.samukawa.kanagawa.jp/chosei/bunkazai/jyuuyou/samukawashitei/1361323387595.html>（参照 2022-04-07）

註2 寒川町観光協会「縄文寒川」：https://www.samukawa-kankou.jp/?p=we-page-entry&spot=341434&cat=23201&page_no=3（参照 2022-04-07）

【引用・参考文献】

- 浅川利一 1991「縄文のカミが出現する土器〈土器のシルエット効果について〉」『多摩考古』21号
阿部昭典 2019「『壺』としての有孔鍔付土器の系譜」『異形の造形：釣手土器と有孔鍔付土器』浅間縄文ミュージアム
今福利恵 2008「勝坂式土器」『総覧 縄文土器』刊行委員会
江坂輝弥 1964「蛇のモチーフある釣手土器」『日本原始美術1』講談社
御伊勢森中世遺跡発掘調査委員会 1979『御伊勢森遺跡（傳上杉定正館址）の調査』学校法人産業能率大学
県営岡田団地内遺跡発掘調査団 1993『岡田遺跡発掘調査報告書』
小杉 康 2007「物語性文様—縄文中期の人獸土器論—」『縄文時代の考古学11』同成社小林達雄 1981「吊手土器と香炉形土器」『縄文土器大成②—中期』P171 講談社
埼玉県立歴史と民俗の博物館 2023『縄文コードをひもとく—埼玉の縄文土器とその世界—』
財団法人かながわ考古学財団 2002『原口遺跡III』かながわ考古学財団調査報告134
財団法人埼玉県埋蔵文化財事業団 1985『北塚屋（Ⅱ）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第48集
縄文時代研究プロジェクトチーム1999「神奈川における縄文時代文化の変遷V—中期中葉期 勝坂式土器文化期の様相その2—土器編年案—『かながわの考古学』研究紀要4
鈴木保彦 1981「香炉形土器」『縄文土器大成②—中期』P181 講談社
鈴木保彦 1996「縄文時代の集落」『考古学を学ぶ 1994 年度かながわ考古学同好会講演収録集』かながわ考古学同好会 129-157頁
諫訪市博物館 1999『縄文土器のふしげな世界第二章—中部高地の釣手土器展—展示図録』
竹沢尚一朗 2023『ホモ・サピエンスの宗教史』中公選書142
堤 隆 2019a「ある釣手土器のライフヒストリー」『異形の造形：釣手土器と有孔鍔付土器』浅間縄文ミュージアム
堤 隆 2019b「3つの釣手土器—大深山遺跡の事例から—」『佐久考古通信学』No.117
鳥居龍藏 1924『諫訪史』
中村耕作 2008「釣手土器」『総覧 縄文土器』刊行委員会
中村耕作 2009「顔面把手と釣手土器」『考古論叢神奈河』第17集 pp. 1-18
中村耕作 2010「釣手土器の展開過程」『史葉』第3号
中村耕作 2011「土器カテゴリーの継承・変容」『考古学研究 第 58 卷第 2 号』
中村耕作 2013『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』（未完成考古学叢書）アム・プロモーション79-301頁
中村耕作 2019 a「釣手土器の世界」『異形の造形：釣手土器と有孔鍔付土器』浅間縄文ミュージアム
中村耕作 2019 b「縄文土器と儀礼」『季刊考古学』第148号 株式会社雄山閣
中村耕作 2019 c「釣手土器とは何か—縄文文化理解における意義—」『佐久考古通信学』No.117
長野県南佐久郡誌編纂委員会編 1998『南佐久郡誌 考古編』
長野県富士見町教育委員会 2011『藤内 先史哲学の中心』
新津 健 1999「縄文中期釣手土器考—山梨県内出土例からみた分類と使用痕—」『山梨県史研究』第 7 号
韮崎市教育委員会編 2001『石之坪遺跡（西地区）』韮崎市教育委員会

- 樋口昇一 1981 「吊手土器・香炉形土器」『縄文土器大成②—中期』P180・181 講談社
- 平出一治 1981 「吊手土器」『縄文土器大成②—中期』P181 講談社
- 富士見町井戸尻考古館 2006 『井戸尻』第8集
- 富士見町教育委員会編 2011 『藤内』富士見町教育委員会
- 藤森栄一 1964 「吊手土器」『日本原始美術 1』講談社
- 藤森栄一編 1965 『井戸尻—長野県富士見町における中期縄文遺跡群の研究—』中央公論美術出版
- 藤森栄一 1966 「釣手土器論—縄文農耕肯定論の一資料として—」『月刊文化財』12月号 pp. 12-15
- 文化庁. 「長野県藤内遺跡出土品」. <https://www.kunisitei.bunka.go.jp/heritage/detail/201/10564>
- (参照 2022-09-07)
- 宮内信雄 2019 「化学分析から釣手土器を読む：長野県宮平遺跡の事例検討」『異形の造形：釣手土器と有孔鍔付土器』
浅間縄文ミュージアム
- 宮城孝之 1982 「縄文時代中期の釣手土器」『中部高地の考古学 II』 pp. 99-132
- 山内清男 1940 「釣手土器」『日本先史土器図譜第VIII輯』先史考古学会
- 八幡一郎 1937 「釣手土器の型式」『人類学雑誌』52-3吉田敦彦 1997 『縄文の神話』清土社